第二章　暦年譜―生い立ちから夜久野隠棲まで

山深い夜久野に移り住んだ先生は自給自足、晴耕雨読の日々を過ごした

1 素晴らしい家庭人

幼い日

先生は、竹次郎、記寿の長男として熊本市で生まれた。「肥後人名辞書」（昭和11年発行）によると、父竹次郎は東京高等師範学校に学び、明治29（1896）年に熊本に戻って濟々黌城北分黌主任を務めた教育者であった。分黌の鹿本中学校昇格に伴い、同校の初代校長を務めた。「資性豪侠にして闊達、古武士の風あり」という人柄で、生徒や教師からの信頼が厚かった。明治39（1906）年には、柔道の創始者として知られる嘉納治五郎・東京高師校長の懇請をうけて辞職、中国人留学生の訓育にあたるため上京した。翌40（1907）年、俊馬先生10歳のときに、働き盛りで急逝した。

濟々黌には俊馬先生の次弟、千里の個人名簿だけが平成13年現在、残っている。それによると母記寿の職業欄は幼稚園教師になっている。大黒柱である夫の亡くなったあと、俊馬（明治30年生まれ）千里（明治34年生まれ）亨（明治38年生まれ）の三兄弟を抱えて、記寿は子供たちのために奮闘したようである。

生活は苦しかったが、母の温愛と、家長としての俊馬先生の努力によって、温かな風がいつも吹いてくる荒木家であった。俊馬先生の執筆文には、幼時の思い出話は少ないが、昭和18（1943）年、文藝春秋に書いた随筆「母が手織り」に往時の家庭の様子がしのばれる。

桜の花の散り敷く荒木家の庭に向かった縁側に、春の陽を受けて記寿が手繰り車を回して、木綿の糸をつむいでいる。母が染料をもとめて自ら染めた何種類かの原色の糸を、庭の両側に置いた木製の器械の間を音をたてて曳く。糸の一本一本を筬（おさ）の目に通し、織機（はた）にかけて、休むこともしないで織って行く。そうしてつむいだ織物が三人の兄弟の晴れ着になるのであった。家のなかには、母の母が、母の嫁入りのために織った晴れ着の織物をつくりかえた座布団があった。三兄弟の晴れ着も、やがて色あせて、ドテラになった。俊馬先生はいう。「世のなかの母親というものは毎日の食事をつくり、子らの着物を織り、仕立て、縫ってくれるひとなのだな」。

一家の若い主人

荒木俊馬先生は、熊本市の碩臺小学校（四年制）を卒業した年に父を失い、母を支えて荒木家の主人としての自覚を持つようになる。大正4（1915）年、熊本の中学校『濟々黌』を卒業して官費の広島高等師範学校理科一部に進む。次弟の千里、末弟の亨は、ともに旧制第五高等学校、京都帝国大学へ進むのであるが、俊馬先生の高師行は、苦しい家計をたすけ、弟たちに進学の道を開くためであったと思われる。しかし、俊馬日記や後年の膨大な執筆内容を調べても、高師進学の動機に触れた記述は見当たらない。

母記寿とともに（左から）俊馬、弟千里、妹瑞枝

未来の熊本の秀才・荒木三兄弟（左から）千里、俊馬、亨

わずかに残った日記によって、明治末から大正初年にかけての旧制中学校の生活ぶりや、弟たちとの心の通い合いの場面をみつめよう。そこには20歳に満たない先生が、一家の主として、おとなの世界にいる。

大正4年の元旦。『朝の面倒な儀式や雑煮などを済まし』たあと、紋付、袴姿で清々黌の恩師宅と友人宅を挨拶回りする。くもり空ながら元日らしい穏やかな日和である。

さすがに街を行き交う人は少ない。不景気。それに明治天皇の御大喪で、賑やかさはない。友人宅を訪ねると、挨拶回りの途中らしく留守であったが、家人が丁重に招き入れる。やがて友人も戻って来て、その姉と妹、女友達や共通の知人あわせて8人の若い男女で、話は弾んだ。カルタをとって夜の更けるのも忘れる楽しさ。10時すぎ、深夜の街をひとり帰宅する。白川にかかった明午橋の上に出ると、水の流れが高く響いて聞こえ、ハッとする。静けさに堪え切れなくなって、詩を吟じながら家路をたどる。翌2日は、日が高くなってから目覚めた。手水をつかってふと足もとをみると、庭の茶の株の間を動く小鳥の姿がある。絵心の豊かな先生の表現を引用しよう。

『チャッチャチャとなく、黄緑色のかれんな小鳥。青い木の繁み。それは彼女にとって広い座敷である。枝から枝へ飛び回る。平和である。きっと欧州の戦乱も知るまい。余は指をさし出した。茶の枝のひとつとして、とまるだろう。そのとき、だれかが庭の外を走った。小鳥は逃げた。向こうの繁みでチャッチャチャ』。これは一幅の絵画である。

後年の俊馬日記に、欧州の旅先の地理を説明するとき、三角とか金桁とかいう文字がときおり現われる。風光明媚、景観への共感をうながすときに使われている。ミスミとカナケタ。それは熊本から天草諸島への掛け橋半島である三角半島の地名である。翌日の正月3日、母の許しを得た俊馬先生は、千里を連れて汽車で、その三角半島の突端にある宇土・黒崎に向かう。親類の猿渡家の招きであった。うす暗い熊本駅から単線の三角線の汽車に乗ると、車中は兵隊さんたちと、若夫婦だけ。静かな車窓に天草の海が広がっている。途中、山側に金桁温泉を包む深い木立。

遙か西に温泉岳がみえる。このとき先生は師走に新聞報道された血なまぐさい事件を脳裏に浮かべていた。自分にとって『ごく親しい知人』一家4人が殺傷されたのであった。若い心を揺り動かすさまざまな思いのなかで、三角港駅着。迎えの船にのって黒崎へ。帆を張ると、船は矢のように海面を滑り出した。左舷は水面すれすれに傾いて、そこから白金のような波がわき起こってくる。びっくりする千里。『余はかつて天草旅行のとき、このような帆掛船にのったことがあるが、弟は初めてであろう』と、弟の心配を気づかう。帆を張り舵をとる船頭さんの姿に感動する。熟練と経験のしみこんだ二の腕を『栄光ある腕』と賞讃の辞を与える。船を自在に操る船頭への信頼の表現でもある。

広島高師時代の先生（前列中央）

弟千里（左）とともに、京都帝国大学の学生時代

天草旅行の楽しい絵日記。先生の生涯の宝物だった

海辺の家から叔母さんが白いハンカチを振って、迎えに飛び出してくる。『余は今日は正式の客の格である』として、俊馬先生は胸を張って玄関から座敷に案内され、叔父叔母と新年の挨拶を神妙に交わした。ご馳走が、すぐに出た。『背面に山、前面に浦を備えたこの家は、いつも山海の珍味が用意されている』のが、こたえられない。

『余は、遠慮などという虚礼を知らない。原人なのである。食欲の命ずるままに箸をおくことはなかった』と、一家の主としての貫禄を示すかのように、ものものしく記しているが、要するに食べすぎたのである。このあと叔父と一緒に有明の海を眼下に見る山頂へ腹ごなしの散歩に出かけたが、その夜、食卓の豪勢なご馳走を前に、箸をとることができなかった。『お母さんは、非常に大食いと言っておられたけど』という叔母の言葉に、反論できない。

翌朝、猿渡家の山で働いている20代の青年と顔を合わせる。青年「旦那様、今日は」、俊馬先生「オー」のやりとり。『目上に対する言葉遣いが立派なのは、叔父さん叔母さんの仕込み』と思いながらも、俊馬先生は一家の主人の重みを実感して行く。暗くなって来た。三角港駅午後７時発の汽車に乗らなくてはならない。礼を言って、帰りは山道を通って三角港駅へ向かった。『急ごう、遅れるぞ』。千里をうながして途中から走り出す。

俊馬先生の頭のなかから黒崎での楽しかった二日間の思い出は、そのとき吹っ飛んで行った。汽車に遅れてはいけない。『何となれば、二日離れた母が恋しかったからである』と本音を綴っている。おとなとこどもと、そのはざまにいる先生であった。

弟よ、ゆるせ

清々黌の生活が戻った。卒業試験が待っていた。校風は質実剛健。最終学年といっても容赦はない。払暁運動といって、真っ暗な暁の星空のもとで柔道、剣道、撃剣の稽古がある。大雪のなかで行軍の訓練がある。『払暁運動とて家を出た。近年希有の大雪なり。果たして雪中行軍の命あり。水前

三角半島の黒崎は美しい海と山海のご馳走で俊馬、千里兄弟を迎えた（大正4年正月）。写真下は三角港から眺めた多島美。左はいまも単線の三角線の電車。右は黒崎の背後のミカン畑のある山

よく学びよく身体を鍛えた中学時代に、柔術に勤しみ賞状をもらった

寺往復である。途中、医学校の生徒と雪合戦をなす。帰黌してまた雪合戦。午後、英語暗誦の臨時試験』（大正4年の俊馬日記）と息つく暇も与えられない。

行軍の翌日、出席は同じ組のクラスメートのうち僅かに13人。歴史の授業にあたった教頭今井精一が嘆く。アーア、セイセイコウももう終わりだ、と。俊馬先生は日記に綴った。『余は言いたい。今井先生よ。いまだ清々黌は最後ならず。吾輩のある限りはまだ衰えずだ』。意気軒昂である。

清々黌育ての親であり、名黌長とうたわれた井芹経平に対しても、批判の矢を放つ同級生もいた。あるとき、熊本の劇場、大和座で、カチューシャの腹話劇が演じられた。若い人たちの間は、行こうか行くまいかの話題でもちきりであった。黌長が数日来の病をおして登校し最上級生である俊馬先生たちに対して「行くべからずの講義」をした。

『思うに、あまりにも生徒をして用心深からしむるからして、保護者がいなくなったあとで失敗することになる』と先生は日記に記している。

親友の島野がつけ加えた。「カチューシャのことはまったく知らなかったが、黌長の話で初めて、どんな話か知ることができた」と。自由闊達な校風のなかで、奔放に意見を出し合い、伸びやかに若者たちが育って行ったことが知られる。

自由な校風であるといっても、しつけはきびしかったようである。大正4年2月7日、盛り場を友人と一緒にブラついていると、種子島先生（種子島健造　数学担当　大正2年7月ー大正4年3月在職）に出会う。『こちらは袴をつけていなかったが、先生も同じだったので幸い叱られることがなかった』と記されている。先生も生徒も着流しで街へ出てはいけない校則であった。

末弟の亨とは歳が隔たっているから、とくに可愛がっている。『おまえはアタマのかっこうがいいから、金もうけが上手にちがいない。大いに金持ちになれ。おれが大いにつかってやる』と、兄貴風を吹かして先生がからかう。この冗談をまにうけて、亨は母記寿にいう。「大人になって金をためたら遠い国へ行くんだ。兄さんに使われてはたまらないから」。そんな幼い弟が可愛くてたまらない。

だが、卒業試験間近の2月25日、生徒が南北両軍に分かれた大演習。疲れて帰って、机に向かったが、亨の寝つきが悪く暴れ回って勉強にならない。『頭がどうもガツガツしていた』先生は、本で頭をいっぱつ、ひっぱたく。大泣きする亨。床のなかで泣いているうちに、泣き声がしだいに細くなって、やがて寝入ったらしい。ああ、と頭を抱えた先生。

『幼き子よ、ゆるせ』。叫び出したい思いが突き上げて来た。亨は寝入ったあと歯ぎしりしている。夢のなかで兄に殴られたことを恨んでいるかのように感じる先生。『ああ、おろかな我め。わが感情は、われをしてみだりに、怒らしめ、罪なき幼な子を安らかにねむらさざらしめ、われを大いに悩ましむ。そはおそかりし。ああ、ゆるせ』。後年になっても、先生の父親にも似た愛情は、千里と亨の二人に注がれた。

大正4年3月2日の歴史、英訳、修身で始まった6日間の試験結果は幾何で失敗したりして全学年中十位。『怠慢の結果、裸卒業なり』と日記に書いている。裸卒業は、優等賞を得られなかったという意味のようである。

しかし、小学時代には見栄えのしない成績であった先生は、徐々に力をつけて、やがて才能を花開かせる兆しをようやく、このころ見せ始めている。この年、弟の千里は全校の二番。熊本の秀才、荒木三兄弟は、まばゆい未来を背負って郷里から巣立つ日を迎えようとしていた。

秀才三兄弟

千里は昭和16（1941）年、兄とほぼ同じ時期に京都帝国大学教授に昇任している。親戚の荒木淑郎医博（熊本大学名誉教授）によると、千里は日本外科学会、日本脳神経学会の会長も務めたわが国の脳外科学の草分けであった。高度経済成長とともに車がふえ、交通事故が多発し脳外科に陽の射す時代がやってきたが、大正の末期まで、脳外科学は、医学界で見向きされない、という感じの分野であった。

千里は昭和11年に欧米留学が決まったが、そのとき兄の俊馬先生に将来の研究分野について相談

した。すると、その場で「だれもやっていないから脳外科をやれ」と奨められたというのである。交通事故多発時代を見通していたとは考えられない。「俊馬さんという人は、宇宙物理学者だけあって、何か瞬時に閃くものをもっていたのかも知れませんね」と淑郎の話である。

兄の奨めをどのように受け止めたのか。それはわからないが、千里はすんなりと脳外科の道に進み出した。いよいよ留学へ。しかし頼みの綱の俊馬先生は、月給の半分を書籍の購入先である丸善にもっていかれたりする貧乏世帯で、留学費用をひねり出す余裕はない。

千里は独力で資金づくりに成功する。恩師である京都帝国大学医学部の鳥潟隆三教授の了解を得て、講義ノートを『鳥潟外科学総論』として出版、これがベストセラーになって、その印税を手にして欧米へ旅立つことができた。

昭和初年から戦後にかけて神経解剖学の平沢興教授、その前の脳外科学の荒木千里教授が、医学界にそびえる京都における巨大な峰であった。

「俊（駿）馬（しゅんめ）、千里（せんり）をはしる（とおる）」。わが子の俊馬、千里、亨に託した父竹次郎の夢はかなえられたといえよう。

「千里は、旧制高校を受験する（旧制）中学生のなかで成績は全国一位であった。しかし、病気して中学四年を2回やっている。1回ぐらい、学校を遅れることを恐れてはいけない」。俊馬先生は、ドイツ留学中に妻京子宛てにこんな意味の便りを出している。親類の男の子が（旧制）高校受験に失敗して、ふさぎ込んでいる話を聞いて、慰めの言葉として妻に伝えたものである。

淑郎の父は、熊本県会議員でもあった弁護士、荒木鼎（かなえ）である。東京の弁護士事務所に務め、資格を得て丸の内で事務所を開いていたとき、郷里熊本の裁判に出張した。仕事を済ませて帰ろうとすると、関東大震災発生。東京壊滅だから、熊本にいた方がよい、という先輩の忠告でそのまま郷里に腰を据えたという。

俊馬先生と鼎は、年齢の近かったこともあり、入熊のときにはちょくちょく泊まって盃を重ねる仲であった。その子供の淑郎と俊馬先生の長男の雄豪は似た年頃で、こちらも仲がよかったが、鼎宅に父子連れで泊まってみんな酔いつぶれた翌朝のことである。

雄豪が、顔を大きく腫れあがらせて、痛い痛いと言っている。太平洋戦争の末期である。若い雄豪が何かわが国の体制について批判めいた言葉を発したとたん、バカモンと先生。近くにあった衣紋掛けで思い切り、わが子を殴りつけたという。

ところが淑郎が慰めているところに二階から階段を降りて来た先生。けげんな顔をして「おや、雄豪、顔を腫らして、どうしたんじゃ」。前夜の騒ぎを覚えていない父親を、雄豪は恨めしそうに

広島高師時代は、瀬戸内海や市中を流れる七つの川で泳ぎ、ボートを漕いだ（背後はのちに原爆ドームとして核被害の告発を続けている広島県産業奨励館。広島高師大正8年卒業アルバムから）

みつめたのであった。

そんな騒ぎがあったからかどうか、判然とはしないが、淑郎は入洛したとき、同じ医学者である千里宅へもっぱら立ち寄るようになった。昭和27（1952）年に熊本大学医学部卒業と同時に海外留学を志したとき、千里から三つの忠告を受けたという。「内科の神経学を修めること」「外科病理学をやること」「美容形成学を研究すること」であった。脳外科医であった千里は、日本の臨床神経学の水準の低さをかねがね嘆いており、遠縁の俊才に次代を担ってほしいとの思いを託したのであろう。しかし淑郎は違う道を選んだ。「千里さんの示唆してくださった美容形成学をやっていたら、いまごろお大尽になっていたでしょうな」と笑うのである（平成12年秋）。

後年のことになるが、昭和51（1976）年5月9日、モスクワ空港経由でイギリスに出掛けた先生は、多忙な海外日程をこなして6月4日、伊丹空港に帰った。そのとき千里重態の知らせに愕然、その足で見舞に向かう。

『◇6・5（土）直ちに京大脳外科に千里を見舞う。5時帰宅　◇6・17（木）ひかりで帰洛。京大病院に千里を見舞う　◇6・22（火）千里を見舞う。意識幾分回復し人の見分けつく　◇7・2（金）午前5時、隆子（千里夫人）より危篤の電話あり。京子と歩いて病院。呼吸困難酸素吸入。8時半帰宅。雄豪病院。9時帰宅。9時5分死去、直ちに病院へ』。

明治38（1905）年に妹の瑞枝、昭和25（1950）年に末弟の亨を亡くした先生から、きょうだいはすべて去った。心のなかを切りさく寂寥のなかで、京都産業大学の基盤固めに先生の多忙な日が続いた。

2 天文学者として

たったふたりの弟子

大学卒業の翌年の大正13（1924）年、助教授に昇進し、恩師新城教授の長女京子（きょうこ）（戸籍名は「京」）と結婚。翌年、長男の雄豪（ゆうごう）誕生。先生の心は春の空のように明るく晴れ上がっている。

京都帝国大学助教授の勤めにも、ようやく慣れて来る。学界に次々に斬新な論文を発表して、新進気鋭の学者としての評価も固まって来た。朝9時には大学の研究室に入り、講義を終えればまっすぐに帰宅、首の据わり始めた雄豪をあやしたあとは、書斎に籠って各国の文献に読み耽る学究生

恩師新城博士の愛嬢京子と挙式。総髪の新進天文学者だった

「京都は美しい。京大は世界で一番美しい環境にある」。助教授時代の先生は宇宙物理学教室のバルコニーに上って東山の風景にみとれた

活は充実していた。

大正14年4月24日の日記は、当時の京都帝国大学宇宙物理学教室のマンツーマンの授業ぶりを浮き上がらせる。『8時から天体力学の講義をする。能田ひとり出席、全部で三人であるが、病気やら何やらで今日はひとりである。しかし天体力学の講義を聴くのはひとりあればまず有難いこととしておかねばならぬ』。

5月22日、早朝から研究室でブリルの論文の検討に没頭して、ふと気づくと午後３時を回っている。食事のために教室棟のそばを通りかかると、掲示板に「荒木先生、待っています　能田」と書いてある。天体力学の講義2時間分をすっかり失念していたのであった。受講者は、竹田新一郎（京都帝国大学助教授で夭折）と能田忠亮（京都産業大学教授）のふたりだけ。荒木助教授の来るのを教室で待ちぼうけ。「非常に相すまぬ」と日記で謝っている。

ある日、研究室を出て昼食のため学内食堂に入ったら、先輩の上田穣・助教授（のち教授）から「ネクタイをしなさい」と注意された。失敗したな、そう思いながら帰途に着く。そうだ、元気付けの肝油がいる。薬屋に寄ろう。出町橋を渡ったところで、学校に洋傘を忘れたのに気付く。このころ講義案づくりに熱中し切っていた。

ある日、朝からポアンカレに読み耽る。その名文に感嘆し、この文章を暗記しようと決意したり、いかなる物理の教科書にもないような立派な講義案を作ろう、と心掛けている。

ある日は午前9時、出学。シャリエの統計力学に没入する。『恒星集団にその論法を応用すれば、流星論の一般論に何か有力なる結論を引き出すことができはしないか。また特殊な場合として彗星に応用して、その質量に関する何らかの見当を得る事なきか』と研究の方向性を探る。

夜はドストエフスキーに熱中した。ロシア語の原書を買って来て「永遠の良人」「叔父の夢」「カラマーゾフの兄弟」を読破する。『ドストエフスキーは、非常に興味をもって読んでいる作者である。カラマーゾフの兄弟は実に面白い。自分はドストエフスキーを研究してみたいと考えている。そのためにはロシア語を研究しなくてはならない。実現できるだろうか』と記しながらも、語学の天才、俊馬先生はロシア語の教科書を取り寄せて勉強しながら、原書で読み進んで行く。それが専門分野研究の合間の息抜きであった。

愛煙家の仲間入りもこの頃である。『煙草をのんで、ボンヤリと考えて居るのも決してムダなことではないと思う。何となれば、一般にそうした場合に、いろいろと学問上の事を考えて居るのである。煙草の煙の間から、問題や、よい思いつきやが湧いて出てくる。いま、問題をいろいろ探っている。自分の考え付いたものもあれば、新城教授の考えられたものもある。それをいかなる方針

先生の講義していた当時の京都帝国大学宇宙物理学教室

なり方法で着手するか。それを毎日、まず煙草の煙のなかから燻(くす)べ出そうとして』煙草をのんでいるのであると弁明に懸命な先生。

他愛のない話も先生にとっては日記の材料である。『春日和。10時まで寝て朝食抜き』の先生が、専門違いの教授宅を訪問。このところ2、3カ月、新聞を読んでいないと言って、その教授から「非常にほめられた」と記している。

岡田啓介・海軍大臣辞表提出、田中義一大将組閣の見出しが新聞紙上に躍っている。中央政界激動の世相のなかの話である。自然科学者は世事にうといようでなければ大成しない、という先輩の諭しであったのか。

『朝出学。新着雑誌に眼を通す。アンドロメダ星雲中に、数個のセフェイド変光星ある事が発見され、その周期より星雲の距離をエスティメイトした論文の紹介及びオープンクラスターに関する論文の紹介、興味あり』『5時帰宅。シャリエの統計力学を研究する。シャリエ一派はこの統計力学を主として星の運動の統計に用いている。これを流星集団やアトムの集団に応用するならば、面白い結果が得られるか』。

翌日は雨が降っている。『9時半、学校に行く。新着雑誌に眼を通す。セフェイド変光星の統計に関する論文、ラセン状星雲の距離に関するクヌート・ルンドマルクの論文。新着雑誌に出てくる宇宙物理学の新研究は、ことごとく一通り読む決意である』と力強く宣言する。学究生活は充実し切っている。

研究に疲れて、宇宙物理学教室のバルコン（バルコニー）に登る。『叡山から大文字山や東山の一列の翠色ことのほか美しい。京都は美しい。恐らく世界のどこを探してもこんな美しい都はあるまい。そして京都帝国大学は恐らく世界で一番美しい地にある大学であろうと思う』と誇らしく記している。

大正14（1925）年6月、先生は、悪化してきたおしりの手術に踏み切る。土曜日の朝、千里の案内で京都帝大医学部付属病院第七保養室に入院。手術は月曜日。何もすることがない。

『全く孤独になるのも非常に有益なことであるように思う。いろいろと反省したり沈思黙想したりする機会が与えられたわけである。われわれは、ふだんは沈思することがほとんどない。こういう時にこそ、よき考え、独創的な考えが、浮かぶかも知れない』。

絵画は少年時代から素人離れした腕前だった（京都帝大生時代）

『およそ人間が根本的に知りたがり、今日研究されている大きな問題が自然科学のうえで三つある。「宇宙はいかにして出来たか、その初めは何であったか」「物質とはいったい何なのか。物質というのは窮極は、なにものから来ているか」。そして「生命の現象」。宇宙の問題は、宇宙物理学の窮極の問題。物質については、物理学の根本問題、生命については生物学及び医学の進むべき道…』考えているうちに眠りに落ちる。

入院中に周りの患者が3人も亡くなって行く。しばらくは専門書を読む気力はなかったのか、小説に夢中になる。谷崎潤一郎、室生犀星、芥川龍之介、徳田秋声、宇野浩二、島崎藤村、志賀直哉、正宗白鳥、佐藤春夫、里見弴、野上弥生子、犬養健、広津和郎、吉井勇…1カ月間の読書量は膨大であった。

「もう（治療に）来なくてもよろしい」。入院から1カ月経った7月21日、包帯交換が終わった。再び研究生活。『読書経済として、専門外の本はなるべく翻訳の優秀なるものを利すべきである』と、専門書に戻る決意を述べている。もう夏休みである。

博士論文は変光星

荒木俊馬先生は、日本における天文学、宇宙物理学の草分けのひとりである。

この分野の研究で、世界の最先端をひた走った時代がある。宇宙の神秘に挑む壮大な研究対象である。先生がこの学問に取り組み始めたころは、極微の世界の研究が天文学に融合する時代にあたった。

現在の学界でほぼ確立されている宇宙の形成と、進歩のパラダイムは次のようである。いわゆるビッグバンに始まって約150億年間に、私たちの宇宙の姿がどのような歩みを続けて来たか、という経過と構図のアウトラインである。

『宇宙は「無」の状態から量子的効果によって生まれた。この素粒子のように小さい量子宇宙はインフレーションと呼ばれる急激な膨張により何億光年というマクロな宇宙になった。そしてインフレーションの終るころに真空のエネルギーが物質エネルギーとして解放され、宇宙は物質とエネルギーに満ちた、火の玉宇宙になった。そしてこの火の玉宇宙が膨張し温度が下がる過程で、銀河や星が生まれ、今日の美しい豊かな構造をもった宇宙ができあがった』（佐藤勝彦・東大教授。「天文学への誘い」1999年 AERA MOOK『天文学がわかる。』朝日新聞社刊から引用）。

現代物理学の主柱である量子力学と相対論的力学は20世紀の初めに生まれ育ち、こうした宇宙論を支えている。では、先生の理学博士論文は、宇宙論形成の学問的研究の経緯のなかで、どのような位置にあったか。研究対象のセフェイド変光星とは何か。大ざっぱではあるが「天文学の世界的権威」という、先生の冠称について、その内容を見つめたい。

昭和4年1月、神戸港を出帆した鹿島丸で欧州留学に向かい、やがてドイツに入った先生はポツダムの天体物理学研究所と、ベルリンのマックス・ラウエ教授のもとで学び始めた。『オレの論文の審査はどうなったかな。パパさん（新城教授）の（主任）教授時代に済んだかしら』。昭和4年5月

ドイツ留学中の先生は、博士論文通過の喜びのなか、Bechsteinのピアノを購入して妻子に送った。京都には放送局（いまのNHK）とふたつだけの名器だったという。 ひとの心に感情を直接訴えかける旋律は、理性の世界にいる先生にとって、尽きない魅力の源泉だった

18日付、妻京子に宛て、先生は手紙で問い合わせている。

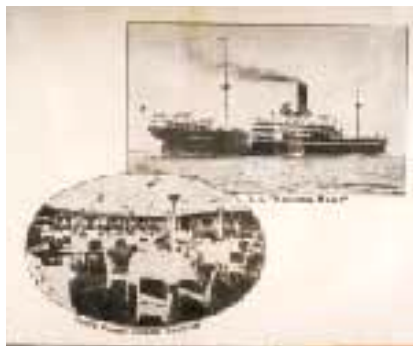
7月8日付通信で無事に理学博士号が京都帝国大学から授与されることを知って『論文の教授会通過、嬉しくないことはない。これからビールを一杯やるつもり』と早速ベルリンの街へ出て行ったのである。

7月末日の京都帝国大学新聞は「宇宙物理の新進同時に学位を受く　上田穣氏と荒木俊馬氏」の見出しで次のように報道している。『…荒木俊馬氏は（大正）12年の本学卒業で「セフェイド変光星の大気圏の圧力変化に関する高温電離の理論による研究」という独文とほか四参考論文である。新進の天文学者で目下洋行中である』。

この報道では、この夏に誕生した三人の理学博士のうち、荒木、上田両氏が宇宙物理学教室に籍を置いていること、しかも新城博士が総長に就任し、あわせて花山の大天文台落成。「まるで、ことしは宇宙物理のあたり年」と述べている。新城が宇宙物理学教室をおこして8年。世界の学界に追いつき追い越せの意気盛んな教室の姿を知ることができる。

多くの祝電（原文は片仮名）が荒木家に残っている。知人からの祝いの手紙も、ひきもきらない。末は博士か大臣か。立身出世の目標とされていた時代であった。祝いの手紙類は、妻京子から寄宿先の「Frau Wendriner, Berlin W.30 Berchtesgadener str. 5 II」へ転送された。

京都帝国大学新聞の伝えたように先生の学位論文は、当時の天文学会の最前線で議論されていたセフェイド変光星に関する研究であった。審査にあたった山本一清、木村正路の両教授は昭和4年7月の教授会で認められた審査要旨を、次のように述べている。



鹿島丸（写真下）で欧州留学へ。旅客機で気軽に海外へ出掛ける時代ではなかった。そのパスポート（左）

それによると主論文（独文）は「セフェイド変光星に於ける気圧変化」と「セフェイド変光星の大気圏の圧力変化に関する定性的研究」の二節に分かれていた。

『セフェイド変光星は、光度の変化に伴って、常にスペクトルの変化、特殊な視線速度変化を呈するのが特徴である。この主論文は変光週期間内における気圧の変化が非常によく変光曲線及び視線速度変化曲線を相伴うことを証明した。セフェイド変光星の変化の原因についてはさまざまな仮説が出されているが、この論文は解明への新しい方向を示したものである』（審査評）

参考論文四篇のなかに「相対性理論により期待さるるスペクトル線の変位を、遊星状星雲の問題

宇宙物理の新進
同時に學位を受く
上田穣氏と荒木俊馬氏
四学位調査の
栗生武博士に

荒木先生に理学博士号の授与を報じた京都帝大新聞

京都の留守宅には博士号を祝う祝賀電報や便りが寄せられた

により観測し得べき可能性あることを論ず」(英文)があった。『要するに著者の提出せる論文は、これによりて学界を裨益(ひえき)したる功績が少なくない』(審査評)のであった。

「変光星の研究とは、いわば星の病理学である」と解説する天文学者がいる。食変光星と呼ばれるのは、連星の軌道面上に観測者が居て、食現象のために星が定期的に光度を変えて観測されるもの。これを除くと、変光星が時間とともに明るさを変える原因については、さまざまな要因がある。振動したり爆発したりするケースがある。周囲のチリやガスの影響によることもある。「何らかの活動現象に起因」していることは間違いない。星の進化の過程で、何か不安定要因があって活発な活動を示すのであろう。

セフェイド(ケフェウス)型変光星の研究は、先生の博士論文より少し前の1912年ごろ、ハーバード大学天文台のヘンリエッタ・リービットによって発表されている。リービットは変光周期と光度の関係に着眼した。遠い銀河のなかに変光星をみつけて観測すれば、その星の含まれている星雲までの距離を概算できるとしたのであった。

1925年になるとエドウィン・ハッブルが、アンドロメダ星雲のなかのセフェイド変光星の観測から、星雲までの距離をはかることができると発表した。変光星の研究者らはやがて、遠くの星ほど、私たちから速い速度で遠ざかって行くこと、つまり宇宙が膨張し続けていることを立証して行く。宇宙の遥かな向こうからやって来る変光星からの光。その微かな光を手掛かりにして、宇宙の謎を解く。先生の博士論文もまた、壮大な宇宙のパラダイムに挑むものであった。

学位請求論文審査要旨

提出せる論文は「セフェイド変光星の大気圏の圧力変化に関する高温電離の理論による研究」(独文)と題する主論文一編及び参考論文四篇とより成って居る。主論文は「セフェイド変光星に於ける気圧変化」及び「セフェイド変光星の大気圏の圧力変化に関する定性的研究」と題する二節に分けてあるが、其内容は固より相連続せる一編を成して居る。

セフェイド式変光の特徴は、其光度の変化に伴って常にスペクトルの変化及び特殊の視線速度変化を呈することであるが、著者は此の三様の変化の相互関係を精細に吟味したる結果、若しスペクトルの変化を以て単に温度の変化のみによるものなりとし、スペクトルと温度とは、変光せざる普通星の場合に於ける如くに相対応するものとして解釈すれば、温度の変化と光度の変化とは大小懸隔して容易に相調和し難きことを注意し、これをよく説明せんが為めには、高温度に於けるガス体の電離に関するサハの理論を応用し、ガス体の発するスペクトルの状態は、其ガス体の温度と圧力とによるものなりとすれば可なること、斯くして三様の変化の相互関係は容易に相調和せしめ得べきことを論じている。第一節に於ては、ハーバード大学天文台サーキュラー三一三号に発表せる七十個のセフェイド変光星に関する観測報告中より、本問題の研究に必要なる材料を具備せるもの五十八個の変光星を選み、これを前述の如くサハの理論をして解釈すれば、最小光度の時の気圧は最大光度の時の気圧に比し十倍乃至三十倍の大さのものと見れば可なりといふこと、及び両時期に於ける気圧の比の対数は、視線速度変化の振幅と直線関係を有するといふ結果を得て居り、第二節に於ては更に一歩を進めて、精確なる観測材料の豊富なるδセフェイ、πアキレイ、及びωサギタリーの三個のセフェイド変光星を取り、仔細にこれを研究し、前掲の理論を応用すれば、変光週期間内に於ける気圧の変化は頗るよく変光曲線及び視線速度変化曲線と相伴ふものなることを証明して居る。

セフェイド変光星の変化の源因如何といふことに就ては、従来種々の仮説が提出されては居るが、甲是乙非未だ学界に定説とすべきものがない。本論文の研究の如きは斯の如き現状に対して新らしき進路を打開するもので、其学界に及ぼす功績は頗る大きいことと思はれる。

参考論文の中

第一　セフェイド変光星及び長週期変光星に於ける変光週期と変光振幅との関係に就て(独文)

第二　変光曲線の統計的研究によりて、週期的変光星は四種類に分ち得べきことを論ず(独文)

第三　長週期変光星の変光要素の変化性に就て(独文)

の三篇は、変光星の統計的研究に関して著者の造詣頗る深きことを示すものであり

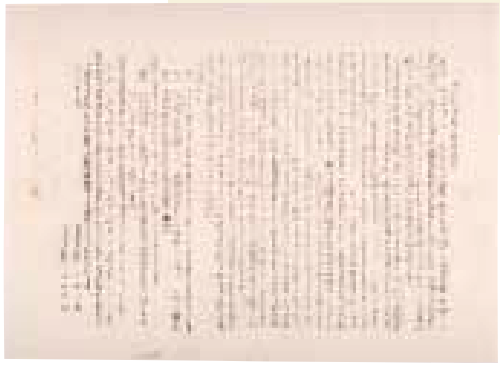
第四　相対性理論により期待さるるスペクトル線の変位を、遊星状星雲の問題により観測し得べき可能性あることを論ず(英文)

の一篇は、理論的研究に関して、著者の創意の頗る傾聴すべきものあることを示すものである。

之を要するに著者の提出せる論文はこれによりて学界を裨益したる功績は尠くない。よって著者荒木俊馬は理学博士の学位を授与せらるべき資格あるものと認定いたします。なほ本論文の審査に当りては審査員教授新城新藏は其教授在職中これに参加したることを附言いたします。

昭和四年七月　　審査員教授　山本一清
　　審査員教授　木村正路

七月八日　教授会通過　山本　印



博士論文の審査評は、宇宙の謎解きに迫る先生の論文に高い評価を与えていた。審査文書(左)と、その内容(上)

3 ベルリン留学

学者群像

1925年、ドイツの物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルクによる行列力学の提出、翌26年のオーストリアのエルヴィン・シュレジンガーによる量子力学の構築と続く物理学の新しい波。しかもその研究の中心であるドイツに、先生は赴いた（留学期間は昭和4年1月から昭和6年5月まで）。そこには物理学の巨人アインシュタイン博士がいて、その周りに俊秀がむらがっていた。20世紀の自然科学の新しい波が押し寄せていた。

留学中の俊馬日記に、ドイツのほかヨーロッパ各地で先生の身近に姿を見せた学者たちは豪華けんらん。世界に追いつき追い越せ、と在外研究員の名で日本の頭脳を海外へ送り出し、新知識の吸収に熱心だったわが国の文教政策が正鵠を射たものであることがわかる。

〈ニールス・ボール〉　『いろいろ偉い学者たちと顔を合わせる日々。会ってみると、普通の人間で、やっぱり遠くから名前だけを聞いている方が何だか偉く思われる。でも、きょうは大学の大講堂に有名な理論物理学者ニールス・ボール（ママ）の講演を聴きに行く。名前だけは雷のように昔から聞いてはいたのだが、さてどんな顔かな』。

ちょっと見て来ようと、妻京子に便りした先生であった。『雷のように昔から知っていた』というのであるから、カイザー・ウィルヘルム研究所長をその後に務めることになるデンマークのニールス・ボーア教授（Niels. H.D Bohr）であろう。

アインシュタインとの論争で知られ、量子力学の構築者のエルヴィン・シュレジンガー（オーストリア）の師である。

〈エディントン〉　アインシュタインの一般相対性理論は、太陽近辺での光の屈曲という現象が立証されたことで、一躍、脚光を浴びた。その相対性理論を正しく評価して、自ら観測隊長として日食時に光の屈曲を証明したイギリスきっての理論物理学者、天文学者エディントン。

先生は昭和5（1930）年6月、アインシュタイン塔のコロッキウム（研究発表会と討論会をかねて、世界的に有名であった）で、エディントン教授の講演を聴き、アインシュタイン塔台長であるフロイントリヒ教授から紹介されて感激した。なにしろ、日本への帰り道に英国へ回って、なんとしてでもエディントン教授の謦咳に接したい思いにかられていた先生であった。このあと7月末に、ブダペストで開かれた国際天文学会出席のため先生は、ベルリンを発つ。ライヒスブルグからブダペストへドナウ河を行く船の甲板で再び、エディントン教授に会い「いずれ英国を研究のため訪れたい」と挨拶したのであった。

この天文学会でポツダム天文台の台長をつとめていたミューラー博士の子息やファン・デル・パーレン教授ら多くの研究者と出会う。日本からの参加者は先生ひとり。そのために会場に、白地に真っ赤な日の丸の旗が飾られてまた感激。『日の丸が、梅干みたいに小さく描かれているが、それは仕方あるまい』と先生。

さらに歓迎レセプションでは、スウェーデン、ドイツのフランクフルトアムマインやノルウェー、ドイツ語圏の各国の学者たちと同席する。ドイツ語と英語でしゃべり、それになんとかスウェーデン語とノルウェー語を聞きとったが、なんとも見当のつかない言葉を話す連中もいて『でもまぁ大いに意見交換』した先生は、各国語の飛び交う世界的な会合のなかで、語学力の一層の研鑽を誓った。

わが国の各分野の先達を期待される新進学者が次々に海外へ研究留学の機会を与えられた。荒木先生もそのひとりだった（昭和4年度の留学名簿：文部省）

画文集

昭和4（1929）年。イタリアからベルリンに着いて、研究生活が軌道に乗り始めた夏、先生は親友であり、留学仲間でもあった長谷川萬吉（のち京大教授）と一緒に、アルプスの山麓を旅行した。南独、スイス、北イタリア一帯を約3週間。雄渾崇高なアルペン連峰のなか、あるいはその南麓の優佳華麗な湖水地帯の旅は、美しい大自然の世界を放浪する旅であった。

先生は、約2年間の留学生活の間に、実に1,700通の絵葉書類を妻の京子に送った。季節感の漂う文章が、詳細な描写にうるおいを与えている。当時は健在で、隠居していた母の記寿にも読ませたかったようで、京子宛てに書かれたものであるのに、ところどころ丁寧な言葉遣いになっているのはそのためであるらしい。

この長谷川博士との仲良し旅行記も絵葉書に綴られて京都の留守宅に届けられた。絵葉書とスケッチは先生の書斎に大切に保存されていた。先生の逝去のあと、長男の雄豪が『疇山旅畫帖』（荒木杜司馬著、昭和55年発刊。杜司馬は、俊馬先生の筆名）として一冊の本にまとめている。この決して短くない旅行記には、旅先で知り合った人たちとの心の触れ合いがほのぼのとした情感を湛えて記されている。失敗談があり、知人との奇遇が描かれていて、読んで飽きない。

序文は生前に親交のあった今日出海（元文化庁長官）と、楠部彌弌（陶芸家）。先生の彩管について楠部は「いずれも楽しく、そして骨格もしっかりしている。ひょうひょうたる中に暖かいもの、きびしいものが感じられる。自由にのびのびと描いておられる」と述べている。

ユーモア

先生が旅をしたそのころ、世界は第一次大戦と第二次大戦のはざま、20世紀のなかではまずまず平和な時代であった。1929年8月13日午前9時25分、ベルリン発の遠距離快速列車に弥次喜多道中さながらに、30歳を超したばかりのふたり旅。ヨーロッパの中央部を走りながら、先生は早速、得意の漢詩をつくってみせ、この方面にはうとかったらしい親友を驚かす。

八月平明発伯城
旷野渺茫輪車行
駅停少女喚振帛
転使遊子湧旅情

伯城はベルリン。旷野を行く汽車のなかからみた駅頭の光景から、旅情をうたったものらしい。旷野と丘陵が次々に現われ、黒い森が続いたと思うと、小さな駅のそばの小川で、何百人もの裸の男女が入浴している風景に息をのむふたり。『中世の封建と宗教の華やかだった昔を思わせる古い感じの市街』を通り抜けて、やがて南独の中心ミュンヘンに着く。

宿屋を決めて、酒好きのふたりである。なにはともあれ宮廷御用酒場といった格のホーフブロイハウスへ向かった。宏壮な大建築。天井の高い広々とした部屋。テーブルに並んだ粗末な木造りの椅子に、びっしりと人々が座って、杯を飲み干している。まるで祭日みたいだが、一年中、この光景の絶えることはないという話に驚く。

飲み方も決まっている。壁際に、図書館の書棚のように棚が並んでいて、そこに大杯が数限りなく置かれている。客は、この大杯を勝手にとって、水で洗ってからビール樽の前へ立つと、係の人が溢れるばかりに注いでくれる。

安い。うまい。さすがに本場である。感激ひとしお。肴は名物の生大根であった。大根を機械を使って螺旋状にそぎ取って長い布状にして行く。食塩を振って、ぎゅっと絞り、包丁を入れると食べやすい大きさの大根片の出来上がり。これがミ

昭和4年夏、先生はマッターホルンをめざして麓のツェルマット（標高1,620m）に着いた。『地球を手玉に取ることのできるような巨人が大斧を振って地殻変動の大褶曲を荒削りして岩山を造ったとするならば、恐らくこの山ができるであろう』。マッターホルンの姿を先生はこう表現して、眼前に広がる山塊を描いた

ュンヘンのビールにぴったりのおいしさ。

あなたたち、なにする人なの。旅の途中で問われて、先生はこたえた。

「私は天文学者、この人（長谷川萬吉）は地震の専門家。つまり天と地をふたりで研究しています。ですから、この人はいつも下（大地）を向いて歩いているし、私は上（天空）を向いて歩いています」。どうです。いいコンビでしょう。そういって、笑いころげる若い日の先生。

コモ湖畔の星空

ミュンヘンのビールに酔い、宿にたどりついた先生は、そのまま眠りにつく。朝。『吉田山の樹々に朝の太陽がパッと照り返った』ような感じをうけて目を覚ました。吉田中大路の六畳間であって、すがすがしい朝の光が庭前の小さな祠の赤鳥居に映えているんだろう、と思っているうち、ハッと気づいて起き上がった。京都にいるはずがない。ベルリンの住みなれた下宿でもない。そうだ、南独ミュンヘンのホテル「ナチオナーレ」のベッドの上。旅寝の夢うつつの朝なのであった。

旅を続けた。やがて、湖面の景観美で知られるコモ湖畔の宿に落着いた。夜空は澄み切っている。黒水晶をみるようである。山の端に月齢二十日位の月が出ようとしている。深夜11時。長谷川のツアイス双眼鏡を借りてバルコニーへ出た。塵埃皆無の山間の湖畔の月面を観測する。環状の山脈や渓谷がはっきりと明暗の影を描いている。

「あ、大きな流星だ」。サン・サルバトーレとモンテ・ブレの山を埋めた、降るような星空の中間あたりを、黄白色の強い光が尾をひいて流れ、消えた。『大流星 ―光度約零等級。色黄白。方向西微北より東微南へ。速度極めて迅し』『月面の観測のあとに流星の観測。ルガノ湖畔の黒水晶のような夜の空に照る月も、光り輝いた流星も、科学ではなくやや夢よりも美しい詩でありました』と記している。

一週間泊まった宿を去る日、料金は全部で183フランケンというので、200フランケンをイプセンそっくりのひげ面の宿の主人に渡した。ところが釣り銭が多過ぎた。指摘すると「間違うわけがないよ」といった顔で、しぶしぶ数え直し始めた。厳粛そのものの顔が、やがて急に崩れた。「黙って多い釣り銭を持って行く人もいるのに、貴方は神様だ」。そう言って、まるで100万フランケンも損しなくて済んだように、先生の手を痛い程に、握り締めて打振ったのである。その素朴な心に思わず笑みをもらす先生であった。

奇遇と遭難

アルプス山麓のツェルマットに着いた。標高1,620メートル、人口750人の静かな村である。自動車が走っていない。夕方、牛や羊が、首に掛けた鈴から美しい音色を響かせながら、山の放牧場から家路をたどる。ふと、遠くに日本人らしい夫婦づれをみつけた。

おや。すぐに東大で天文学を研究している萩原雄祐（のち東大教授、文化勲章受賞）と気づいた。日本を遠く離れたアルプスの、しかも名もない村で、数少ない天文学者同士が再会したというのである。『あたかも広漠たる宇宙空間におけるふたつの恒星の遭遇のような不思議な奇遇』に先生は、ただもう驚くばかりであった。

翌日、長谷川とともにアルプスの氷河を眺めながら登山を始めた。南面の斜面に、陽を浴びて高山の草花が咲いている。抜けるような青い空に映える鋭く尖った山の頂。得も言われない眺望。アルプスの空気はおいしい。足もとには、花のじゅうたん。夢中になって山道を行くと、緩やかな道が、次第に急傾斜になり、ゴツゴツした岩肌のなかに迷い込んでしまった。

径の痕跡があるかないか幽かになり、ついに痕

跡さえもなくなった。巌の角から角へ、ひと足ずつ、足もとを吟味しながら綱渡りのように岩の斜面を下って行く。氷河を歩きたいと考えたことを悔やんでも、もう遅かった。元の道へ戻ることは、下りて行くよりも至難の業であった。なるほど、こんな道であるから、登山服と登山靴に身を固めてガイドに導いてもらう必要があるのだな。まるで魔物のような奇怪な形状をした氷山へ近づいた。ここからは、ほとんど垂直に切り立つ岩場である。あたりにどこか緩やかな道でもないかと見まわしても、断崖絶壁ばかりである。

「あれ、エーデルワイスだ」。岩と格闘していたふたりが、揃って叫び声を上げた。アルペンの名花である。葉も花も白い。ビロードのような花の膚。先生は岩の向こうに咲く、この花に触れようとして、岩の背を抱きかかえるようにして手を伸ばした。

その手の感触は羽毛のよう、水分のない天然の造花を思わせた。幻の名花に巡り会えた喜びに恍惚としたその瞬間であった。

「危ない」。注意を促す長谷川の叫び。先生が足がかりにしていた岩場の土砂が崩れた。先生は体のバランスを失い、断崖から滑り落ちそうになった。失敗(しま)った。右手にエーデルワイスの株をつかんでいた。そのとき、転倒したおしりの所が、なんと幸いなことか、突き出た岩角に寄っかかった。滑落が止まった。

あっ、左の手に鋭い痛みが走った。思わずつかんだ荊の株で、掌から真っ赤な血が吹き出しているではないか。慎重に。ゆっくりだぜ。互いに励まし合いながら、氷河と岩場を踏みしめながらやがて小径を見つけて、ひと息ついた。無事を祝い合った。靴もズボンも土まみれ、血まみれ。

ホテルに帰ると萩原が「氷河の上をあちらこちらと、さまよっているのを上の方から見ていたよ」という。危うく遭難しかけた冒険談を話したい思いにかられながら、あの危機一髪の出来事を知らない顔で押し通すのに苦労する先生と長谷川であった。

『H（萩原）君は、あすこの地を去るという。われわれも放浪の旅人。アルペン北麓で思いもかけず奇遇して、また再び別れ行く人間の姿。アルペンの大自然に比して、いかにも微小なその人間の姿が、いままた新しく、しみじみと感ぜられる』と俊馬日記にある。日本アルプスや近畿の山登りを趣味にした先生は、大自然のなかに身をおくことで、自分という存在を客観的に見つめようとしていたようである。

荒木さんの繪

荒木俊馬さんとは、もう四十年餘りものつき合いである。四十歳になった時、同年の者達で集った丁酉會の發會式でお目にかかって以来になる。

先日、未亡人と御令息が山科の工房にひさびさおたづね下さって、荒木さんの生前の繪の本を出したいといわれ、昭和四年の頃よりかいて居られたスケッチや奥さんに送られた旅行先よりの寫生のハガキなどを拝見して驚いた。いづれも樂しくそして骨格もしっかりした繪である。こうした面を一度も私達に見せもせず、自分だけで樂しんで居られたようだ。誰でも少し何かが出來ると、無性に見せたくなるものなのに、それをされなかった荒木さんの人柄がしのばれる。それだからこそ、こうした良い繪が出來たとも考えられた。

ひょうひょうたる中に暖かいもの、きびしいものが感じられる自由にのびのびと畫いて居られる荒木さんの繪である。

4 土の香り

夜久野の秋祭り

終戦の日

京都帝国大学教授の職にあった先生は、昭和20（1945）年8月15日朝、快晴のなか、京都帝大の学生であった雄豪と、みそらのふたりを連れて比叡山の麓の渓流に向かった。沢遊びの遠足、という意味もあったが、目的は他にあった。サワ蟹獲りである。蛋白質欠乏症にみんなが苦しんだ食糧難時代。サワ蟹は唐揚げにしたら、中味も甲羅もあますところなく食用になる。高等官一等の高官であっても弁当持ちで出掛けることのできる食糧事情ではない。親子三人でひと握りのあぶり豆が昼食用であった。奮闘した甲斐があって、小さなビクに何匹か獲物が入った。平時の鯛の大漁に劣らない思い。雄豪はひと足先に大学へ戻って行き、先生とみそらは午後3時頃、家路をたどった。

街中の北白川に戻ってくると、街が異様に静かなのである。

珍らしく空襲警報もないせいだろうか。不思議に思いながらも歩いて行くと、横町から警防団の制服を着た中年のふたり連れが沈んだ表情で現われた。うしろから尾いて行く形になった。すると、制服のひとりが「ずっと前から敗けると思っていたよ」とポツリ。敗ける、といえばいま脳裏から片時も離れることのない太平洋戦争に決まっている。怪しからん。怒り心頭の先生ではあったが、男の話が何を意味しているのか理解できないまま、静まり返った街筋を吉田山麓のわが家へ急いだ。

玄関を入ると、妻京子がひとりで泣いている。

先生「いったい、どうしたんだ」。

京子「日本は敗けました」。

京子の態度は、まるで自分が取り返しのつかない過ちをおかしたかのようであった。天皇陛下による終戦の詔勅がラジオで正午に放送されたという。

呆然自失、その夜、一睡もしないまま、いかに

アルプスの氷河と絶景に心を奪われた先生は、わが感激を京都の妻へ得意の絵を描いて送った（昭和4年夏）

半世紀を経て先生の長子である雄豪教授（当時）は、俊馬先生の旅の跡をたどり上記の場所を探しあてて同じアングルから撮影した

わが身を処すべきか、について思いを巡らせた。占領軍が間もなく進駐するであろう。日本の官吏はすべてその指揮を受ける。いままで戦って来た占領軍の禄をはむつもりは毛頭ない。ではどうするか。官職を捨てるしかないではないか。屈辱を忍んで京都帝国大学教授のポストにしがみつくか。

『富貴も淫するあたわず　貧賤も移すあたわず　威武も屈するあたわず　これをこれ大丈夫という』（孟子）の大丈夫でありたいと願う先生であった。ハラは決まった。終戦後、初めての理学部教授会に出席した。戦争を非難する声が早くも現われていた。数日前までとは正反対の意見に転向した発言に憤然とした。

だが、いまは沈思のときである。山村に籠り、晴耕雨読して、家族とともにわが人生のこれからの生き方を考えたい。弟の千里に打ち明けた。もちろん反対された。だが、兄の決意が動かないのを知って「兄貴の頑固にはなぁ」とサジを投げた。

郷党の大先輩であり尊敬する狩野直喜教授を訪ねて決意を披瀝した。狩野教授はしばらく考えに沈んだのちズバリと言った。「そのような学者が、ひとりぐらい居てもよかろう」。そのあとに付け加えた。「学問はやめないのだな」「原稿料ほしさに新聞や雑誌にやたらに雑文ば書かんごつ」。肥後訛りの忠告であった。

8月24日、辞表を提出。理由はたった一行「一身上の都合」。兵庫県境の夜久野（京都府天田郡上夜久野村）で開墾の仕事をしていて、終戦の翌日に友人とともに訪ねて来た菱沼政雄を頼って、家族をひと足早く発たせた先生ではあったが、残務整理があり、さらに一緒に辞職した門下生たちの身の振り方の相談にのったり、痔疾の治療も重なって、京都を出たのは9月18日、天候は荒れていた。

「わが、アメリカに降伏せざるの記」の掲載誌（昭和30年8月号）

終戦まで大日本言論報国会の理事の一人であったという理由で、間もなく公職追放になったことを新聞の公報で知ったが、先生はすでに山村の生活に溶け込んでいた。

先生は、昭和30（1955）年に雑誌『新論』（8月号）のもとめに応じて「わが、アメリカに降伏せざるの記」を書いて、夜久野へ隠棲したときの経緯と心境を明らかにしている。そのなかで「自己弁護するつもりも、必要もないが」と断ったうえで、隠棲について、次のように述べた。

『戦争中、軍部の役を買って出て肩書をもらうようなマネをしたことはまったくない。軍部のやり方についても不快な思いがあった。しかし、戦争は始まったのである。日本の国が負けるようなことがあってはならない。協力するしかないのであった。戦意を失わせるような行動をとってはならなかった。私の科学技術についての知識を軍部に提供したことは事実である。それは全く私の意思に従ったのである。国民の義務と信じたからである』。

先生の考え方については賛否さまざまな意見があろう。しかし先生は自らの信念に従って、戦争に加わったことを全く否定していない。日本という国が戦っているとき、足を引っ張る真似ができるのか、というのである。そして先生が最も軽蔑したのは終戦を境にして態度を百八十度豹変させた知識人たちであった。自らの言動に責任をもつこと。それが先生の信念であった。

沈思のとき

終戦直後の先生の心境を記した新聞記事がある。いずれも大阪毎日新聞である。「哲学者になる天文学者“敗戦に徹す”荒木博士帰農の弁」（昭20.10.13）の記事は「終戦とともに土に還って人間再開の道を踏み出した姿は、学界はもちろん、良心的な知識人への大いなる反省と課題を提出し注目を集めている」と書き出している。この記事は、先生が理論物理学の権威として日本科学の尖鋭的な提唱者であり、また日本人として言論報国にひたむきに熱情を傾けて来た事実を紹介している。10月27日付同紙は、続報として「土に還る天文学者　自己批判から京大荒木教授退く」の見出しで、開拓地での小屋住まいの生活を伝えている。この記事は「（学者としての）良心的な動きとして、各方面から注目されている」と先生の横顔を、次のように紹介している。

京都帝國大學教授荒木俊馬
依願免本官
昭和二十年十月二十七日
内閣總理大臣男爵幣原喜重郎

辞表提出から二カ月余、正式に辞職が発令された

「博士の科学観によると、科学というのは唯物的・無性格のものであっては国家人類に寄与しうるものではない。むしろ唯心的な立場から国家への奉仕を行うべきものである、とする。（そうした考えに基づいて）日中戦争の始まったあと博士は、軍の委嘱によって中国に渡り、言論報国会会員として国家主義的立場を展開して来たが、終戦の突如の報に、痛烈な自己批判を自らに科した」。

隠棲した先生は、山間の荒れ地に鍬を振るい、夜は読書しながら世の動きに目を光らせた。敗戦によってわが国では社会構造や政治の形態、文化体系、教育制度などが変わった。それが時代の流れであったことは認められねばならない。しかし、日本の国民が本当に、祖国日本をどうすべきかという視点から反省し、批判を加えて、自らのものにする努力を払ったであろうか。

やがて、そのような思いが膨らんだとき、俊馬先生は再び、京都の地に戻る決意を固める。それは足掛け10年後のことである。

山野に溶け込む

夜久野の空は、まぶしく輝いていた。『朝、日の出美麗なり。夜久野の谷々に、白霧湧き出で、次第にぼかされて行くほどに、宝山の頂、初め太陽光に照らされて、見るまに太陽出づるなり。今日はことに農家の屋根を中心にして大きな虹、ことのほか麗し』の眺望。一家そろって、この地が気に入った。

土の香りに満ちた生活が始まった。新しい生活への期待に心は豊かだったが、厳しい生活は覚悟の上であった。京都からの引越し荷物が届き、整理の一段落した昭和20年9月29日、反物1反を手土産に村長を訪れた先生に、朗報があった。

1町歩ほどの開墾地を貸してくれるという話が持ち込まれた。とりあえず知人から芋畑3畝を借りて、ぼつぼつ畑づくりしようとしていた一家にとって、途方もなく広大な畑の提供は、開墾の苦しみへの不安はあったものの、これからは生活の基盤ができ、将来設計ができる。

『夕焼雲美麗、細片あたかも黄金の魚鱗の如し』という俊馬日記の文字は一家の高揚した気持ちを表現している。

平和を語る

昭和22（1947）年、夜久野にこもった先生は小学五年生を対象にした月刊誌『学友五年生』（奈良市やまと書苑発行）の巻頭で「少年読者に望む」のタイトルで次のように語りかけている。

『新しい平和な日本。これは今の日本の国民が一人残らず待ち望んでいるところです。しかし、ただまちのぞむだけでは何時になっても新しい平和な日本がやって来るわけではありません。日本人自らが自分の力で新しい平和な日本を作り上げねばならんのです。では一たい誰が作り上げるのでしょう。それは、言うまでもなく、これからの日本人、すなわち、みなさんのような少年諸君です。ですから、みなさんの両方の肩には、平和新日本を作り上げるという実に大きな任務がかかっているのです。とうとい毎日毎日をぼんやりと夢のように過してはなりません。

平和な日本というのは決して弱い日本のことではありません。ほんとうに強い日本のことです。剣や鉄砲をもって戦争することだけが強いのではないのです。岩のように動かない平和を打ち建てるということは戦争する以上に強くなければ出来ないものです。それは、みなさんの学校でも、らんぼうな、ケンカ好きな子供がほんとうに強いのではなく、落ちついて親切で、人のためにつくす子供こそが真に底力のある強い子供であるのと同じことです。

心の底から強い平和な日本を作り上げるためには、みなさんの一人ひとりが強い日本人とならねばなりません。人にたよって生きて行くのは弱い人間のことです。学問をするのでも同じことです。学校で先生から何もかも教わって、それでほんとうに強い学力のある人間になれるものではありません。先生から教わるのはほんの糸口です。あとは自分で自分の学力をみがきあげねばなりません。

西洋の諺に「天は自ら助くるものを助く」というのがありますが、天の神様がたや仏様たちに、どんなにお願いしても、自分で努力しなければ天は助けてくれない、自分で自分を助ける人であって始めて、天はその人を助けるという意味です。

昔から世の中の役に立つ立派な人はみな自分で自分を助けて戦った強い人でした。有名な発明王エヂソンなども学校に行ったことのない人。また学友六年生の四・五月号をごらんになった方は、野口英世先生のお話を読んだでしょう。この世界的大学者は中学校にも行けなかったのですが、人にたよらず自分の力で自分を築き上げた大偉人です。みなさんに私が望むことは、みなさんが一人残らず、このような強い人間となり、そして平和新日本を作り上げるために働いて頂きたいことです』。

大宇宙の旅

先生は、この夜久野時代、子供たちに向って、宇宙の神秘について話しかけた。『大宇宙の旅』（昭和25年発行）や「楽しい理科教室」シリーズ『昼夜の長さと季節』『黄道をさまよう天体』『日食と月食』といった本を恒星社厚生閣から出版した。

戦後の暗い世相は明るい夢をもとめていた。遥かなる宇宙に眼を向けて気宇壮大な人間になろうよ、と呼びかける先生の本によって、幼い心を揺さぶられた子供たちは少なくなかった。

「私に大宇宙という名の未来をさずけて下さった大恩師、偉大な荒木先生に心から感謝しています」。平成13年の春、漫画家の松本零士（東京在住）が、京都産業大学におくって下さった色紙に、こう記されていた。

『銀河鉄道999』『宇宙戦艦ヤマト』をはじめとした宇宙ミステリーを描き続けている松本は、宇宙への眼を荒木先生によって開かれたひとりであった。

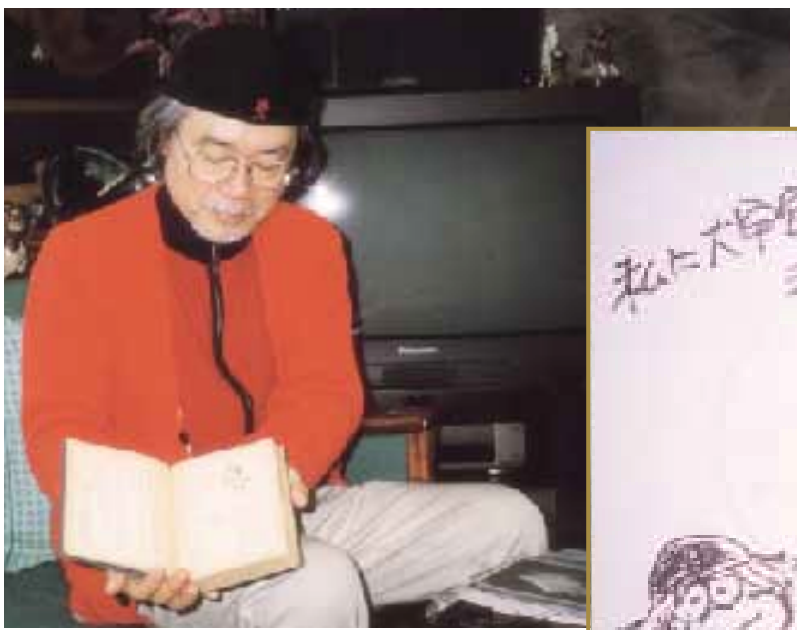
「この本、私の宝物ですよ」と言って書庫の奥から松本が取り出したのが『大宇宙の旅』の初版本であった。九州に住む小学生の松本が、何回も繰り返して読んだから、どの頁も手アカで黒くなっている。この本は家人にも触れさせたことがないから汚れはすべて私のつけたものだ、と言う。この本との出会いがなかったら、宇宙に関心を持つことのない人生を過ごしたかもわからない。宝もの、というのは、私の人生を決めたという意味なのですよ、と松本。すごいのは、この本に記されている内容が、当時としては、世界の学界の最先端の知識を豊富に盛り込んでいること、挿入されている資料や絵、写真のすべてが、そのころ最新のものであったことだ、と言う。中学、高校生になってから天文学や宇宙物理学の解説書、専門書を読破して行くにつれて、この本の内容が専門書の水準に劣らないことに気づいて、改めて感嘆した記憶があると言うのである。

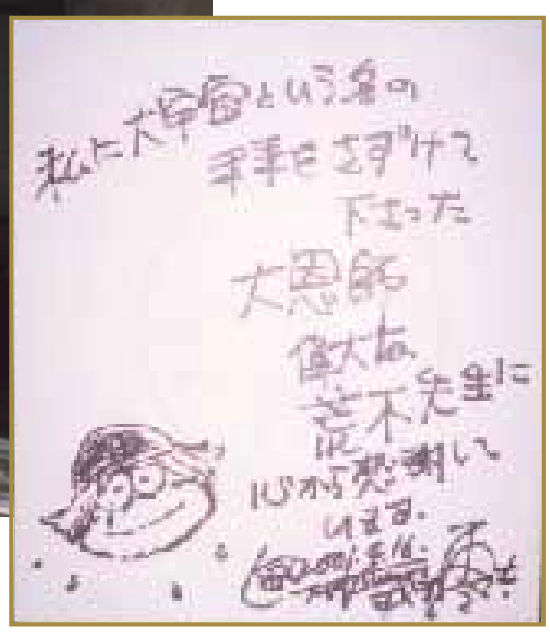
「京都産業大学の設置認可が1月25日ですね。それ私の誕生日なんですよ。偶然にしても、なんとご縁の深いこと」と、松本はほお笑む。

白刃の上の心境

晴耕雨読。子供たちも自分で教育する。そのためには学問し研究する心を瑞々しく保ち続けなくてはならない。先生は自らに厳しい生活態度を強いた。「白刃の上に立つ心構え」で隠棲生活に入った。引越しをすませ、田舎の畑仕事に慣れ、村人との共生もできそうだ。昭和21年夏季の日程表がある。

『　◇ 5：00　起床、洗面、部屋掃除
　◇ 6：00　朝食
　◇ 6：30　農地へ行く
　◇ 7：30 ― 9：00　ラテン語勉強
　◇ 9：00 ―11：30　農耕
　◇11・30　昼食





「わが人生の大恩師」と松本画伯は称えて、色紙にサインした

◇12：00 ー12：40　万葉集
◇12：40 ー14：30　午睡
◇14：30 ー16：00　図画、自然観察
◇16：00　帰宅
◇17：00　夕食、部屋掃除
◇18：30 ー20：00　数学、ピアノ
◇20：00　読書、就床

以上は晴天の一日。雨天も起床、朝食および就床時刻は同じ。7時から数学またはピアノ、理科、習字、図画、歴史』がぎっしり。

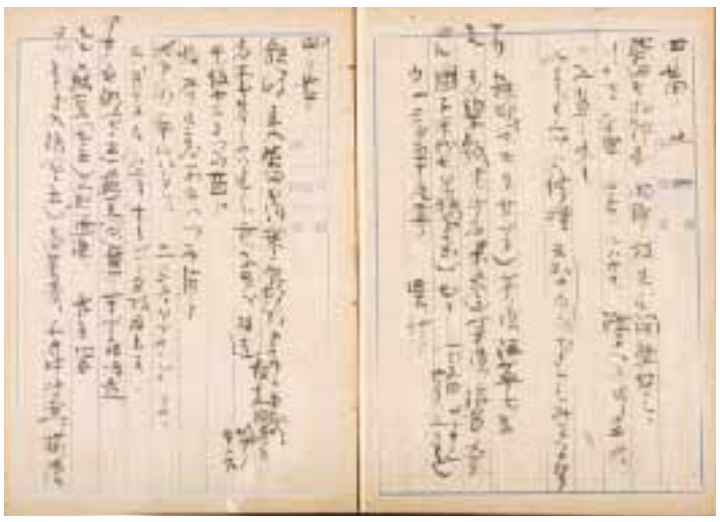
数学は三男の俊豪（としひで）、ピアノは、みそらとみほし。父の期待に歯をくいしばってこたえようと努める子供らとともに、先生は修行僧に似た日々を送った。

読書は幅広かった。専門の宇宙物理学関係の論文著作については、毎月のように京都大学へ出掛けて熟読した。そのほかに『鳥瀉外科学総論』。さらにはシェークスピアの『ハムレット』『ヴェニスの商人』（坪内逍遙訳）、ドストエフスキーの『しいたげられた人々』『カラマーゾフの兄弟』、ウェールス『生命の科学』、トムソン『科学体系』…それから就寝前は必ずショーペンハウエル著作集。『夜ショ哲』の記載が何年間も日記に続く。書物が増えて行く。昭和22年の秋を過ぎると、収拾がつかなくなって書棚を発注。12月29日朝9時、雪のなか、みそら、俊豪をつれて荷車を曳いて受け取りに行く。帰りは吹雪になった。車輪が新雪に沈んでしまう。『雪甚だ深く、すこぶる難行軍たり』。夕方6時にようやく自宅に持ち帰り、3人とも冷え切った身体でそのまま床へ。それでも翌朝いつもより早く起きて、いそいそと本を整理する先生であった。

高名な天文学の京大の元教授がやって来たことが近隣に知れた。先生のもとに、文化人が集まるようになり、講演の依頼がひきも切らない。学校での講演のとき、星座の見方について実地に指導もしている。懇切な教えぶりに質問続出。夜の更けることが多かったが、先生はにこやかであった。星空の授業で、帰宅の足がなくなったとき、講演先の小中学校の宿直室で泊まることもしばしばであった。若い人たちとの出会いを楽しんだ。

食糧難

だれもが飢えに泣いた時代。ヘビも貴重な蛋白源であった。『秋晴れの日なり。帰りに蛇一匹を捕う。昨日（知人の捕えて来た）のシマ蛇を塩漬けにして保存しておいたものと一緒に焼いて』中（昼）食の食膳にのせた先生。『美味なれども骨多くして且つ固し。これは鳥の骨たたきの如く包丁の背にてたたき焼けばよからん』と先生は記している（昭20.11.10）。芋、麦、山の草。テンプラにしたりカレー粉で味つけしたり京子の苦闘は続いた。なんといっても食材の種類に限りがある。副食に変化をもたせるのは容易でなかった。川の魚はとっくに獲り尽くされた。だが、ゴリを食う習慣はないのか、川床にかなり目につくではないか。大雨の日、先生は俊豪と出漁した。『ゴリをすくいて、夕食になす』と日記にある。


食糧難のなか京子夫人苦心のメニュー

キノコ論文

先生の夜久野生活には、ひとつの特徴がある。馬鈴薯、甘薯をつくる、葛根（かっこん）を栽培する。そんなとき、京大植物学教室の友人に尋ね、専門書をとり寄せている。ウサギやニワトリを飼うときには、動物学教室から最新の論文を借りて来て、猛烈に勉強する。畳の上の水泳訓練みたいな感じがないではないが、理論を知らないで実践はできない、の信念は揺るがない。

裏目に出たことがある。キノコである。台所を預かる妻の京子が、食材探しに苦心していた。野山に山菜がある。キノコは貴重品ではあるが、山へ行けば種類豊富。副食にすれば美味である。しかし、毒キノコがこわい。であれば、勉強して安全無害なキノコを妻子に持って帰ることにしよう。

『昭和22年3月5日（水）晴　キノコの研究を始む』と俊馬日記にある。植物の本から「食菌と毒菌」をテーマにした一文をメモして研究に耽る。『こがさたけと判定す』『みだれたけなり』『スキー場地域で菌類3種採取。スケッチす』『食菌ひらたけなり』『雪割草狩、収穫大なり』の記述がこの年、続いている。

画集としても楽しさ溢れるキノコの研究

真っ赤なる　鶯茸を　静もれる
　　桧林に　独り摘みおり　　京子

先生は自信を深めて、近くの北山からシメジを含むキノコ類をどっさり採って帰って、さぁ食べよう。しかし、である。世界的な天文学者といっても、キノコの研究は素人同然。『中に害毒のものありしと見ゆ。俊豪、靖豪、みほし、みな嘔吐（おうと）す（みんな吐く）』ということになる。

とはいえ、せっかくの研究を中毒騒ぎぐらいで白紙にしてしまう先生ではない。『京都産業大学国土利用開発研究所紀要』第1号（昭和59年1月発刊）の資料「夜久野菌類 The Mashurooms in Yakuno」に騒ぎのあとの成果をみることができる。長男の雄豪との共著になっている。先生の絵筆の腕は確かである。ムラサキシメジからカラカサダケまで、55点の極彩色のキノコ図鑑は、学術資料ではあるが、画集の側面をもっている。キノコの色彩、特徴を的確に捉え、しかも絵画として鑑賞しても楽しい。

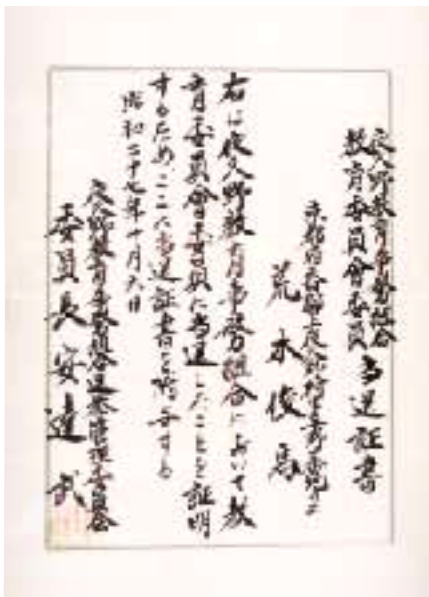
教育委員長に就く

天文学、宇宙物理学の最高峰であり京大教授として言論人として知られていた先生を周りの人たちが放っておくはずがない。教育に対しての俊馬先生の情熱が伝わってくると、地元の教育界も動いた。

乞われて昭和27（1952）年、夜久野教育事務組合の教育委員長に推され、この地区の教育行政のトップに就いた。京都府内の教育関係者とのつながりが復活する。京都府庁や京都市役所へたびたび出掛けるようになって、先生の行動半径がふたたび京都の中心部に重なって行く。

晴耕雨読の生活のリズムに変調が現われた。翌28年初めの俊馬日記をみても、教育長に就きたいという人物が猟官運動にやってくる。すると別の一派の現校長が、地元の意見の総意であるとして、反対の表明文を持ってくる。人事のドロドロした渦が先生を包む。春になると、義務教育のあり方をめぐって教職員組合が全国一斉に休暇申出の運動を展開しようとする。

先生は、教育の場に、教員によるストライキを持ち込ませない方針を表明して、その意思を貫く。臨時に教育委員会の会合を開き、夜久野地区の小中学校教職員が義務教育職員法案反対闘争に参加することを禁止した。その通達の撤回を要求する校長、教職員ら15人と団交。『余は断固として禁止通達の撤回に応ぜず、夜半に至るも押し通す』『中央の指令により一斉賜暇闘争は中止になったる由』と日記に記されている。



教育委員、ついで委員長に推された先生は、教育の現場に触れた。大学創設の夢が膨らんで来たころだった

自らが信じる、教育についての考え方に、まことに忠実であって、決して妥協しない先生の信念が見えている。

この昭和28年、教育委員長として剛腕を振るう先生が金沢大学学長選にかつぎ出される。『9月4日。金沢大学の教え子から来信。現学長と余との決戦となる模様。再選反対派の教授連が余をかついでいるが、余自身は承諾を与えたものの余り乗り気ではない』『9月15日（金沢大学より来信）ファッショとの極めて悪意あるデマ宣伝が飛んで学長選挙は形勢逆転の由』。自分から動いたわけでないから、俊馬先生は平然としていたが、かつての教え子たちのなかに、俊馬先生が地方の教育委員長として、このままおさまってしまうのではないか、それはあまりにももったいない、優れた人格識見をいまこそ、この時代に問うべきではないかという声が強まり、昭和29年、先生は隠棲に別れを告げて、京都市内の私立・大谷大学に移った。

『余の送別会20人。午前2時までのむ。1斗3升』（昭29.3.10）とある。

3月末、吉田中大路の自宅を管理していた人に挨拶し俊馬先生は帰洛した。昭和32（1957）年には、先生の力量が評価されて京都大学の理学部と大学院の講義にも戻った。

◆

済々黌、センバツで優勝　先生は、故郷熊本が好き。家族と一緒に熊本入りして親類や友人と旧交を温めた。昭和7（1932）年の済々黌創立50周年で、「天文学の起源」を記念講演。京都産大創設のあとも、講演や学生募集で熊本入りした。

済々黌の卒業生であり、同黌百年史の編集委員長を務めた本田不二郎（熊本県の元・教育委員長）は、母校の野球部長を務めた昭和33（1958）年春、センバツ決勝戦で中京商を破って、見事に制覇し紫紺の大優勝旗を手にした。その翌日の4月11日、同窓の毎日新聞京都支局長、山本礼の紹介で、野球部員を連れて東映の映画撮影見物のため入洛。その帰り道の国鉄京都駅頭。大勢の男女を連れた先生に“済々黌バンザイ”を三唱されて感激した。

大先輩の俊馬先生の思い出を話す本田・元熊本県教育委員長

4月6日付で先生から次のような激励文が宿舎に届けられていたことをあとで知った。『済々黌ナイン諸君へ　大正4年卒業生荒木俊馬…本日ラジオ放送を聴き、大雨の中に風邪を押しての御健斗、特に城戸君の意気、全く涙なしには聴けない、ただ感激の極みでした。次は強敵の早稲田ですから、無理をせずに身体に気をつけて御健斗を祈り上げます。くれぐれも養生第一として無理をせぬよう、勝敗は天に委せて堂々と美しく闘はれんことを切に祈ります。競技は勝敗ではありませぬ。あくまでも立派な済々黌魂の武士道的スポーツマン精神を発揮して美しく戦って高校野球史上に範例を残して下さい。よしんば惜敗しても、全員風邪のことでもあり少しも不名誉ではありません。 4月6日』。

このあと、本田は先生ともう1回、会っている。県立熊本高校長（昭和46年－48年）だったとき、京都産業大学総長の名刺を持った先生が学生募集にやって来た。質の良い、磨けば輝く原石のような生徒を送ってほしいと頭を下げられて恐縮した。「大先輩だし、戦前から聞こえた大学者ですからね」と懐かしがるのである。

◆◆

◆

宇宙物理学教室の三代　星を研究する学問として、星学、天文学、星辰物理学、天体物理学などの講座が各地の大学に古くから設けられていた。京都帝大には大正10年、宇宙物理学科が誕生した。新城新藏教授（1873－1938　のち総長）の命名であった。その後の研究によって、極微の世界が大宇宙の姿に重なることが明らかになり、ビッグバンによる宇宙創造論が浮かび上がってくる。『宇宙物理学』という壮大な名称はまさに学問の未来を占うものであった。

　その宇宙物理学教室の第一期生が荒木俊馬先生であり、新城の愛娘・京子と俊馬先生は結婚した。新城教授は、親しくしていた中国文学の狩野直喜教授（文化勲章受賞）から「尭の時代の年代についての問題提起」を受けて研究を進めて、東洋の天文学史の世界的な権威としての評価を得た。たまたま狩野教授が熊本・濟々黌の俊馬先生の大先輩であったことから、狩野教授に目をかけられ、先生も公私にわたって貴重な示唆、指導をいただいたという。

　俊馬先生の長男は荒木雄豪・京都産業大学名誉教授。京大宇宙物理学科の卒業であるが「学生時代に課外活動として始めた馬術との縁が切れず、そちらの方が専門になってしまって」（雄豪・名誉教授の話）馬術の世界で有名である。『現代天文学事典』の初版は俊馬先生との共著。馬術の方では英語、フランス語、ドイツ語と日本語の四カ国語による『国際馬事辞典』(バラノフスキー著、荒木雄豪編訳）のほか『クセノポーンの馬術』などの馬術書を編訳している。

◆◆◆

生後5日目の長男雄豪を抱く俊馬先生